PRESS RELEASE

茶碗の中の宇宙

樂家一子相伝の芸術

THE COSMOS IN A TEA BOWL

TRANSMITTING A SECRET ART ACROSS GENERATIONS OF

THE RAKU FAMILY

利休の愛した美

初代 長次郎 | 黒樂茶碗 銘 大黒
重要文化財 | 桃山時代（十六世紀） | 個人蔵

2016年12月17日(土)—2017年2月12日(日) | 京都国立近代美術館 The National Museum of Modern Art, Kyoto

2017年 3月14日(火)—2017年5月21日(日) | 東京国立近代美術館 The National Museum of Modern Art, Tokyo

茶碗の中の宇宙
一子相伝の芸術

茶碗の中の宇宙とは、全ての装飾や美しい形を捨て、手捏ねによる成形でさらに土を削ぎ落としながら造形を完成させていった茶碗を用い、その茶碗によって引き起こされる無限の世界、正しく宇宙のように果てしなく広い有機的空間のことと捉えています。

つまり、一服の茶を点てます。相手は、その茶を飲みます。その行為により二人の関係の全てが茶碗の中を巡ります。その茶碗の中を見つめながらの人間の思いは、他に想像もできないほどの大きく深い意味を有し、まさに宇宙と呼ぶべき無限の世界が広がるのです。

今から450年前、長次郎という人物によって創造された樂茶碗は、一子相伝という形態で現在まで続いています。一子相伝とは、技芸や学問などの秘伝や奥義を、自分の子の一人だけに伝えて、他には秘密にして漏らさないことであり、一子は、文字通り実子でなくても代を継ぐ一人の子であり、相伝とは代々伝えることです。

この様な考え方で、長年制作が続けられている樂焼は、長い伝統を有していますが、しかし、それらは伝統という言葉では片付けられない不連続の連続であるといえます。長次郎からはじまり15代を数える各々の代では、当代が「現代」という中で試行錯誤し創作が続いています。本展では、現代からの視点で初代長次郎はじめ歴代の「今—現代」を見ることにより一子相伝の中の現代性を考察するものです。正しく伝統や伝承ではない不連続の連続によって生み出された樂焼の芸術をご覧いただけます。

私が生きている間に二度とこれほどの規模の展覧会は開催できない

十五代 樂吉左衛門

覚入の長男として生まれる。
昭和48年（1973）東京藝術大学彫刻科卒業後イタリア留学。
父、覚入の没後、昭和56年（1981）
十五代吉左衛門を襲名し現在に至る。
平成19年（2007）には滋賀県守山市の佐川美術館に
樂吉左衛門館が新設され、館ならびに茶室を自身で設計した。
当代の造形は、伝統に根ざしながらも現代性へと
大きく踏み出している。特に「焼貫」の技法を駆使し、
大胆な篦削りによる彫刻的ともいえる
前衛的な作風を築き上げている。

十五代 樂吉左衛門 | 焼貫黒樂茶碗
平成24年（2012）| 個人蔵

ロサンゼルス・カウンティ美術館、サンクトペテルブルク・エルミタージュ美術館、モスクワ・プーシキン美術館で開催され約19万人を動員。好評を博した展覧会が、さらに充実度を増し、京都と東京の国立近代美術館に凱旋します。
千利休が愛した初代長次郎の黒樂茶碗「大黒」をはじめ、
歴代の重要文化財のほとんどを一挙公開。
本阿弥光悦の重要文化財をはじめ、よりすぐりの作品も出品されます。
「わび」茶の思想を強く反映した造形世界をお楽しみください。

【展覧会の見どころ】

1. 初代長次郎、光悦の重要文化財が、かつてない規模で揃います
2. 利休が愛した名碗が揃います
3. 樂家450年の伝統と技をご覧いただけます
4. 現代の視点でとらえた初代長次郎はじめ、歴代の「今」をご覧いただけます

十五代 樂吉左衛門 | 焼貫黒樂茶碗 銘 暘谷
平成元年（1989）| 個人蔵

樂焼と樂家

樂焼とは

樂焼は、織田信長、豊臣秀吉によって
天下統一が図られた安土桃山時代（16世紀）に花開いた
桃山文化の中で樂家初代長次郎によってはじめられました。
樂焼の技術のルーツは中国明時代の
三彩陶といわれています。この時代には
京都を中心に色鮮やかな三彩釉を用いる焼きものが
焼かれはじめていましたが、長次郎もその技術をもった
焼きもの師の一人であったと考えられています。
長次郎の残した最も古い作品は、本展に出品される
二彩獅子、天正2年（1574）春につくられました。
おそらく樂茶碗がつくられるのはそれより数年後、
天正7年（1579）頃ではないかと考えられています。

樂焼の技法

一般にイメージされる焼きものは、轆轤で制作、電気やガス、
あるいは薪を用いた窯で焼き上げるというものです。
樂焼は、轆轤や型を使用せず、
一点一点手捏ね（手捻り）によって制作されていて、
それは初代長次郎にはじまり現在15代まで続いています。
さらに形ができた段階で、今度は篦によって
土をそぎ落とすという方法により造形を作っていきます。
それは極めて彫刻的な手法、造形性に富んでいます。
さらに、焼成は極めてユニーク、我々の常識を覆す
焼成法です。樂焼の窯は、1点しか入れることができず、
それも、備長炭という堅い炭を用いて
鞴で火を調整しながら焼き上げます。
樂家の制作は職人による分業を行いません。
弟子は取らず当主独りで制作、しかし、窯焚きのときだけは
出入の人々が集まり深夜から手伝います。手伝う人も
親から子へと窯焚きの技を伝えます。そこに集う全ての人の
心の和と絆が一碗の茶碗を炎の中から生み出します。
そこからできた赤や黒のモノトーンの作品は、
利休の侘びの世界を示しているといえます。

15代、一子相伝で継承されてきた樂
約450年の歴史の重みと同時に、
それぞれの時代感覚を反映させながら
独自の美を追求してきた新しさを併せ持ちます

樂焼の名称

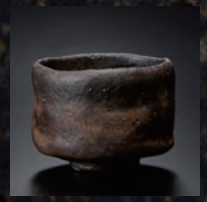
千利休や長次郎が生きていた時代は、
まだ「樂焼」という名はありませんでした。
この新しく生まれた茶碗は当初「今焼」と呼称されました。
今焼かれた茶碗、つまり“Art Now”その時代の前衛芸術でした。
樂の名称は豊臣秀吉から樂の字を賜ったことによるといわれています。
長次郎は秀吉の建てた「聚楽第」の付近に住まいし、
そこから出土する「聚楽土」を用いて茶碗を焼きました。
聚楽屋敷に住まいした利休の手を経て世にだされ
「聚楽焼茶碗」とやがて呼ばれるようになりました。

宗慶印 黒樂茶碗 銘 いさらい
桃山時代（十六世紀）｜樂美術館蔵

樂家

樂家は、「樂歴代の系譜」にあるように
初代長次郎から十五代樂吉左衛門まで続いています。
しかし、系譜からもわかるように、
世襲によってその系譜が作られてはいません。
他家からの養子により親戚関係を結び、
その「子」に当代の総てを伝えるという
一子相伝の芸術を展開しています。
この様な形で樂の精神性から技術や歴史までを
伝えている陶家は見ることはできません。
その意味でも樂家のもっている芸術の伝え方は
伝統を考える上でも重要な示唆を与えます。
樂家がこの地に居と窯場を構えたのは、天正4年（1576）に
京都法華寺再建のための勧進帳記録（京都頂妙寺文書）に
田中宗慶はじめ二代常慶、宗味の名前が残されており、
それによると、宗慶は南猪熊町、常慶は中筋町、
宗味は西大路町に住まいしていたことを確認することができます。
南猪熊町は後に聚楽第の利休屋敷があったあたりと考えられます。
現在の樂家の場所には、聚楽第が造営された頃に
移ったのではないかと考えられます。
以来450年、樂家歴代は変わることなく
樂焼の伝統と技術を現代に伝えてきました。
その制作と焼成法は450年前と
全く変わらぬ方法で今も焼かれています。

初代 長次郎
二彩獅子
天正2年（1574）
重要文化財｜樂美術館蔵

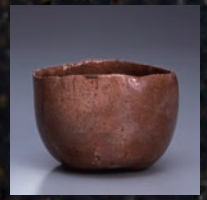


初代 長次郎
黒樂茶碗 銘 面影
桃山時代（十六世紀）
樂美術館蔵

初代 長次郎
黒樂茶碗 銘 シコロヒキ
桃山時代（十六世紀）
裏千家今日庵蔵

田中宗慶
三彩獅子香炉
文禄4年（1595）
個人蔵

三代 道入
黒樂茶碗 銘 青山
江戸時代（十七世紀）
重要文化財｜樂美術館蔵

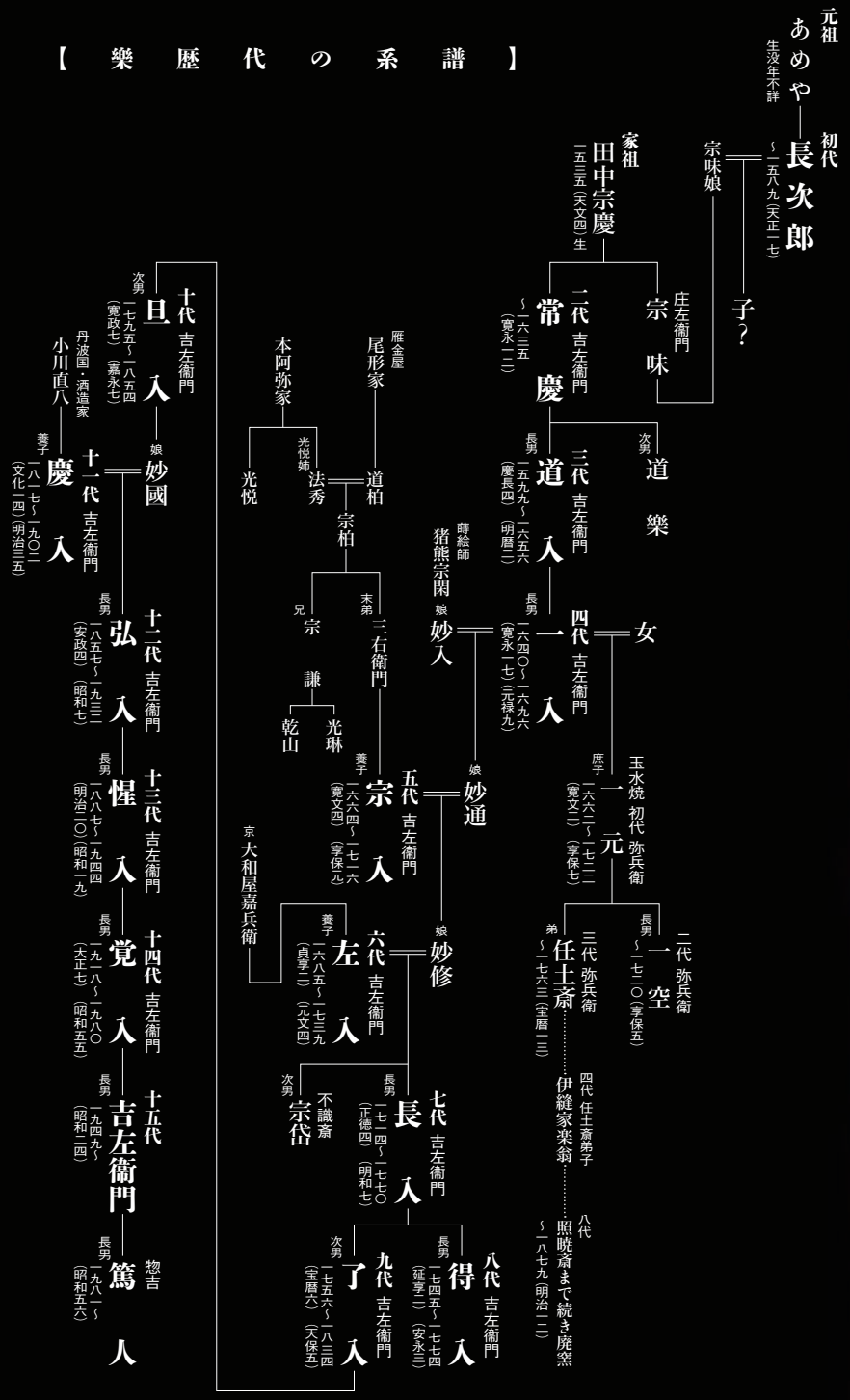


本阿弥光悦
赤樂茶碗 銘 乙御前
江戸時代（十七世紀）
重要文化財｜個人蔵

十四代 覚入
赤樂茶碗 銘 杉木立
昭和47年（1972）
個人蔵

十五代 樂吉左衛門
焼貫黒樂茶碗 銘 滓雲は風を涵して谷間を巡る
悠々雲は濃藍の洸気を集めて浮上し
平成15年（2003）｜樂美術館蔵

【樂歴代の系譜】



十五代 樂吉左衛門さんに聞く
長次郎出展作品の見どころ

大黒 おおぐろ

桃山時代（十六世紀）
重要文化財 ― 個人蔵

今回メインの長次郎茶碗。
利休の関わる長次郎茶碗を7碗集めた
「利休七種」と冠される7つの茶碗、
「大黒」はその筆頭ともいえる。
利休の侘び茶の真髄を表し、
長次郎茶碗随一と謳われている。
深い存在感、静かな佇まい、
小さな茶碗が宇宙を支配する。
まさに「茶碗の中の宇宙」を表す茶碗。

無一物 むいちぶつ

桃山時代（十六世紀）
重要文化財 ― 頴川美術館蔵

松平不昧が愛した茶碗。
無駄な表現、誇張や変化を
削ぎ落とした存在感は、「大黒」とともに
利休の侘び茶の真髄を表している。

［展示期間］
京都会場　12月17日 ― 1月15日
東京会場　3月14日 ― 4月2日

禿 かぶろ

桃山時代（十六世紀）｜表千家不審菴蔵

利休が愛し
常にそばに置いた
黒樂茶碗「禿（かぶろ）」
表千家に伝わる名碗
利休の年忌の時にしか
使用しない。
「禿」の名は
太夫に常に付き従う少女
かぶろから名付けられた。
……利休のそばに
いつもいた茶碗だから。

太郎坊 たろうぼう

桃山時代（十六世紀）｜重要文化財｜裏千家今日庵蔵

初期的なプリミティブさを残す。
長次郎が利休から依頼され
制作し始めた頃の素朴な作振り。
轆轤にはない柔らかな姿
手のぬくもりが感じられる。
樂茶碗は手のひらの形。
※展示では赤樂茶碗の
「太郎坊」「二郎坊」が揃います

一文字 いちもんじ

桃山時代（十六世紀）｜個人蔵

利休が見込みに『一』の字と
自分の花押を漆で書き込んだ。
なぜ「一」の字を書き込んだのか、
しかも茶を点てる見込みの底に！
４００余年の歳月の中で
漆はすでに剝げ落ちているが、
漆によって保護された部分と、
漆の字が載っていなかった
部分の質感の違いで、
「一」と「花押」とが判読される。
茶を点てる部分であるから
いずれは剝げ落ちるということを
知りながら、人々が４００余年の
歳月を大切に伝えてきた。
受け継がれてきたことの尊さ、
人々の伝える心を
この茶碗は証している。
長次郎赤樂茶碗の中で最も
完成度の高い茶碗、その意味でも
「一」の書き込みは理解できようか。
※東京会場は会期中展示替えがあります

ムキ栗 むきぐり

桃山時代（十六世紀）｜重要文化財｜文化庁蔵

不思議な茶碗「ムキ栗」。
高台と腰は丸、胴と口は四角。
丸と四角、この不思議な茶碗も
利休の好み。利休の建てた
二畳の茶室「待庵」の空間と
相似形をなしている。
「待庵」に座ることは、
まるで「ムキ栗」の
見込みの中にいるようなもの、
そういうイメージが交差する。
まさに茶碗の見込みは深い宇宙!!
※京都会場のみの展示となります

俊寛 しゅんかん

桃山時代（十六世紀）｜重要文化財｜三井記念美術館蔵

この「俊寛」にも故事来歴がある。
利休が九州の弟子に
長次郎の茶碗をいくつか見せて
選ばせたところ、
この黒茶碗を選んだという。
もちろん利休がそのとき
最も好んだ茶碗であったが、
利休は、九州鬼界ヶ島に流された
俊寛に例えて「この黒茶碗は、
俊寛僧都よな」とつぶやいたという。
箱表に貼り付けられた
小さな紙札に書かれた
「俊寛」の字は利休自筆という。
※京都会場のみの展示となります

万代屋黒 もずやぐろ

桃山時代（十六世紀）｜樂美術館蔵

利休が所持し娘の手を経て
娘婿、万代屋宗安所持となった
「万代屋黒」。万代屋家に
伝わった茶碗だからいつしか
人々は「万代屋の黒茶碗」
と呼ぶようになった。
それが茶碗の名の由来。
利休をテーマとした映画
『利休にたずねよ』で、
市川海老蔵さん扮する利休が
死の間際に茶を点て、
利休自刃の後、
中谷美紀さん扮する
利休妻（宗恩）が一人この茶碗で
茶を点て利休を偲んだ。
※東京会場は会期中展示替えがあります

開催概要

茶碗の中の宇宙

樂家一子相伝の芸術

THE COSMOS IN A TEA BOWL:
TRANSMITTING A SECRET ART
ACROSS GENERATIONS OF
THE RAKU FAMILY

展覧会公式サイト

http://raku2016-17.jp/

一般のお問い合わせ

京都展 075-761-4111（代表）
東京展 03-5777-8600
（ハローダイヤル 8:00－22:00）

報道機関のお問い合わせ

茶碗の中の宇宙 広報事務局
（ユース・プラニングセンター内）

〒150-8551
東京都渋谷区渋谷1-3-9
ヒューリック渋谷一丁目ビル3F

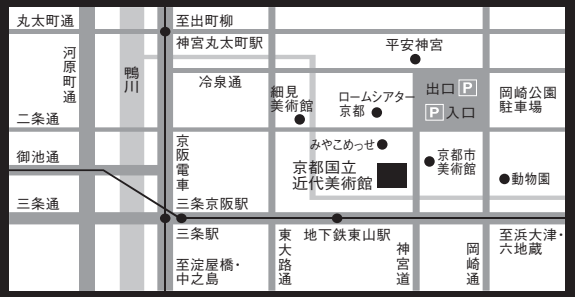
TEL 03-3486-0575
FAX 03-3499-0958
Email raku@ypcpr.com

京都展

2016年12月17日（土）—2017年2月12日（日）
京都国立近代美術館

The National Museum of Modern Art, Kyoto

住所 〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町
TEL 075-761-4111（代表）
●JR・近鉄「京都駅前」（A1のりば）から市バス5番銀閣寺・岩倉行、（D1のりば）から市バス100番（急行）清水寺・銀閣寺行「岡崎公園 美術館・平安神宮前」下車すぐ ●阪急「烏丸駅」「河原町駅」、京阪「三条駅」から市バス5番銀閣寺・岩倉行「岡崎公園 美術館・平安神宮前」下車すぐ ●阪急「烏丸駅」「河原町駅」、京阪「祇園四条駅」から市バス46番祇園・平安神宮行「岡崎公園 美術館・平安神宮前」下車すぐ ●市バス他系統「岡崎公園 ロームシアター京都・みやこめっせ前」下車徒歩約5分、「東山二条・岡崎公園口」下車徒歩約10分 ●地下鉄東西線「東山駅」下車徒歩約10分
※お車でお越しの場合、岡崎公園駐車場（地下）をご利用の有料入館者は、駐車場の割引（1台1名）を受けられますので駐車券をお持ちの上お越しください



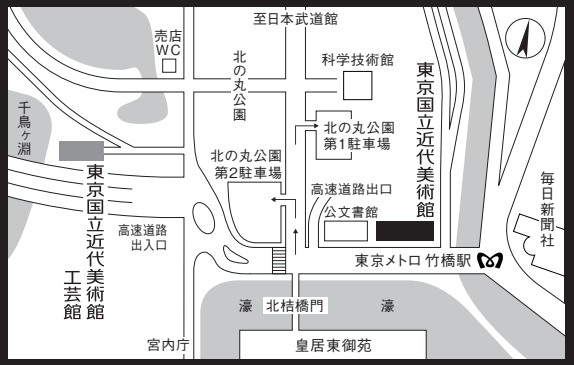
主催＝京都国立近代美術館、東京国立近代美術館、NHK京都放送局、NHKプラネット近畿、京都新聞、日本経済新聞社
後援＝京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会
協賛＝日本写真印刷
特別協力＝樂美術館、国際交流基金
休館日＝月曜日及び12月28日（水）～1月2日（月・振替休日）、1月10日（火）［ただし、1月9日（月・祝）は開館］
開館時間＝午前9時30分－午後5時
入館は午後4時30分まで
入館料＝一般1400円（1200円）
大学生1000円（800円）
高校生500円（300円） 中学生以下無料
（ ）内は、前売りおよび20人以上の団体料金。
※本展の観覧券でコレクション展もご覧いただけます。
※前売券の発売期間は10月15日（土）－12月16日（金）まで。

東京展

2017年3月14日（火）—2017年5月21日（日）
東京国立近代美術館

The National Museum of Modern Art, Tokyo

住所 〒102-8322 東京都千代田区北の丸公園3-1
TEL 03-5777-8600（ハローダイヤル8:00－22:00）
●東京メトロ・東西線「竹橋駅」1b出口より徒歩3分
●東京メトロ・都営地下鉄「九段下駅」4番出口、「神保町駅」A1出口 各徒歩15分



主催＝東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、NHK、NHKプロモーション、日本経済新聞社
協賛＝日本写真印刷
特別協力＝樂美術館、国際交流基金
休館日＝月曜日［ただし、3月20日（月・祝）、3月27日（月）、4月3日（月）、5月1日（月）は開館］、3月21日（火）
開館時間＝午前10時－午後5時（金曜日は午後8時まで）
入館は閉館30分前まで
入館料＝一般1400円（1200円）
大学生1000円（800円）
高校生500円（300円） 中学生以下無料
（ ）内は、前売りおよび20人以上の団体料金。
※本展の観覧券でコレクション展もご覧いただけます。